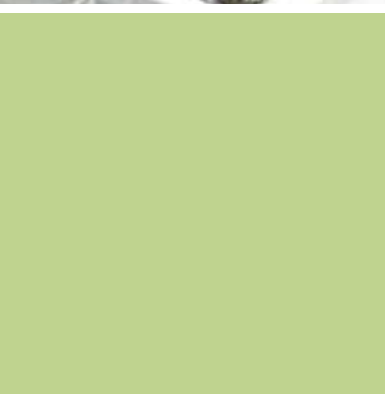
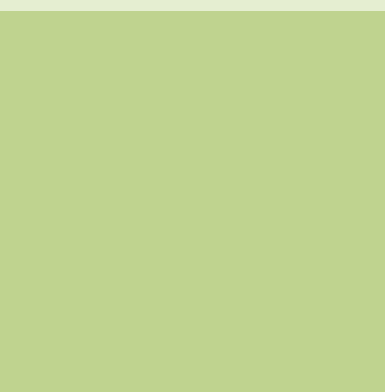


16

感覚・皮膚・運動部門

眼科



入局を希望する皆様へ



福井大学医学部眼科学教室
科長・教授

いなたに まさる
稲谷 大

Profile

1995年、京都大学医学部卒
米国バーナム研究所客員研究員、大阪赤十字病院、熊本大学の助教、講師などを経て2011年7月、福井大学医学部眼科の三代目教授に就任。
日本眼科学会理事、日本緑内障学会理事、臨床眼科編集委員、Japanese Journal of Ophthalmology section editor、2008年Rohto Award受賞、2009年Nakajima Award受賞、2009年日本眼科学会評議員会賞受賞、など多数。



近代的な医局講座を構築することを目指

私は2011年7月から教授として着任致しました。

当教室は、一般社会の常識に合う近代的な医局講座を構築することを目指しています。年功序列にとられない能力・実績に基づく人事評価、研修医の生活向上、優れた研修機会提供や育児産休問題にも力を入れており、育児をしながら働くことができる環境づくりを構築し、女性でも働き続けられる医局を目指します。

眼科独自の教育プログラム

医師を育成する医局講座にとって、新規入局者は貴重な存在です。日本眼科学会の統計によると、卒後研修必修化に伴った制度改変以後、眼科医を志向する若手医師が急速に減少し、地方病院の眼科閉鎖が全国で起こっています。地方の大学医局講座にとって、優秀な若手医師が眼科を志してくれるように環境整備することは喫緊の課題です。そのため目標としているのは、古い慣習を改めた近代的な医局講座の構築です。具体的には、眼科独自の教育プログラムにあります。それは、入局から月単位で学習目標を定め、チェック機構により到達度を新規入局者全員に対して行い（4ヶ月に1回）、各人の課題に応じてきめ細かい指導を行います。このチェック内容は文章化され、教授を始め指導医に伝達され、情報を共有化することで迅速な指導に反映されます。

活発に議論や意見が言える医局環境

しかし、教育プログラムに完璧と言う言葉はなく、日々進化させなければなりません。近代的な医局にあっては、プログラムの改革は管理者が行うのではなく、新規入局者や若手医師の意見を聞き、その意見を基に改革します。医局講座には封建的な雰囲気がなく、新規入局者や若手医師が気兼ねなく活発に議論や意見が言える環境であることが重要であると考えています。

福井大学入局者の大半は福井大学出身者ですが、他大学出身者も在籍しており、入局大歓迎です。また、福井県で働きたい眼科医の先生、他の科の先生で眼科学に興味がある先生も大歓迎です。優秀な若手が、先輩に気兼ねすることなく自ら希望することを行い、その才能を開花させるために近代的医局講座の構築を目指していきます。

●オリジナルホームページ

www.med.u-fukui.ac.jp/GANKA/

教室員から初期研修医・学生へのメッセージ

医局内は楽しく アカデミックに

眼科学教室 講師
松村 健大 [平成18年卒]

当教室は眼疾患に対し専門外来を設置し、眼科最先端の診療と手術を学べる施設です。

特に、緑内障、網膜硝子体疾患、白内障に関しては県下トップレベルにあります。臨床業務は日々多忙を極めますが、医局内は楽しくアカデミックであることに努めています。

また後期臨床研修の4年間で専門医レベルに達することができます。当教室での研修希望者を是非お待ちしております。

16 眼科

科 長 (研修統括者)	稲谷 大 出身大学 京都大学医学部卒業（1995年） 専門分野 緑内障、視神経再生治療
診療内容	緑内障 糖尿病網膜症 白内障 神経眼科 眼瞼疾患 斜視・弱視 眼底疾患・黄斑部疾患（光線力学療法を含む） 角膜・コンタクトレンズ ロービジョン 色覚異常
研究内容	緑内障の視神経保護治療 緑内障の手術治療 糖尿病網膜症と血管新生緑内障の治療に関する基礎研究と臨床研究
教室員構成	計21人 教 授 稲谷 大 平成7年京都大学卒 専門：緑内障 留学：米国カリフォルニア州サンフォード/バーナム研究所 准 教 授 高村 佳弘 平成8年福井大学卒 専門：糖尿病網膜症 留学：米国ネブラスカ大学 業績：日本糖尿病眼学会理事 日本眼科学会プログラム委員 糖尿病眼学会福田賞、白内障学会奨励賞 講 師 松村 健大 平成18年福井大学卒 助 教 辻 隆宏 平成11年京都大学卒 有村 尚悟 平成22年浜松医科大学卒 後沢 誠 平成23年福井大学卒 岩崎健太郎 平成25年福井大学卒 盛岡 正和 平成27年福井大学卒 山田 雄貴 平成27年福井大学卒 院 生 折井 佑介 鈴木万理恵 杉原 友佳 大嶋 秀幸 田中 健悟 市橋 祐志 眞田 侑季 医 員 田中 波 垣鐔 陽央 小森 涼平 阿部 優樹 清水 咲良

教育内容 紹介

当眼科講座では、年間約1550件の眼科手術をこなし、高度医療手術である網膜硝子体手術、緑内障インプラント手術を多数行っており、十分有効な研修を行える状況であり、関連病院との連携の中で、眼科専門医制度に準拠した卒後研修を進めております。また文部科学省・学術振興会の競争的研究資金に基づいて、最新の眼科研究に取り組んでいます。若手の医師に入局して頂き、研究や海外留学を奨励することで、世界に通用する研究や臨床を福井大学眼科で行いたいと思います。高度な医療を行い、地域医療に貢献することが大学病院の責務と考えますが、習得した技術を繰り返すだけでは、知識と技術は時代遅れのものになり、医学的進歩に乏しく研究教育機関である大学附属病院を持つ意義がありません。それは、将来において救うことができる患者様を見捨てることになります。国立大学に従事する我々は、国民に対して高い志を持って診療に当たらなければなりません。未来に語り継がれる優れた医療は、研究活動から生まれます。臨床医が、診療の現場で難題に直面し、新しい解決策を見出そうと臨床研究や基礎研究を行う姿こそ、当眼科講座が目指す医療・医学のあり方です。臨床現場での問題を、科学的観点から解決策を見出そうとする医師の育成を目指しています。

福井大学 眼科学教室の 専門医コースの 研修プログラム

年 数	プログラム
1 年目	● 大学病院での研修 ● 診察方法と検査機器操作の基本の習得 ● 眼科各疾患の知識と診察手技の習得 ● 外眼部手術を中心とした基本手術手技の習得 ● 内眼手術である白内障手術の開始 ● 地方会や全国学会での発表経験
2 年目	● 大学病院での研修または関連病院での研修 ● 外来診療の経験 ● 白内障手術の習熟 ● 日本語での原著論文の執筆と投稿（専門医に必要）
3～4 年目	● 関連病院での外来診療経験 ● 白内障手術を独りでできるようになる ● 白内障手術以外の手術の経験を身につける ● 希望者は大学院へ入学（眼科学教室で臨床と研究を並行して行う）して、複数報の国際学術論文の発表、学位の取得
5～6 年目	● 眼科専門医の取得
7～8 年目	● 大学で教員として研究やより高度な手術の習得を経験 ● 関連病院でより責任のある指導者として診療や後輩の指導をおこなう

女性医師の 育児支援

産休枠や育児枠（原則：9時から5時までの勤務）を作成し、働ける条件を医局長と相談することで、仕事を続けながら家事もできるように医局で全面的に支援しております。

手術 トレーニング ～ウェットラボ～

若い研修医の先生には、数多くの手術経験を積んでもらいますが、豚眼などを用いた手術トレーニングも重要です。

当方では、普段手術室で用いているものと同じ手術顕微鏡、白内障手術機械をウェットラボ用に完備しています。日常の臨床と同じ機器を使うことで、より実戦的な訓練を重ねてもらうことができます。モニター付きなので、助手だけでなく複数の先生からも指導を受ける事ができます。

学生実習にもこれらの設備は使用され、マイクロサージャリーの面白さを体感してもらうのにも一役買っています。



初期研修も
力を入れています！

初期研修における研修目標

- 診療見学、実習を通じて、眼科疾患と診療に必要な知識、技能を修得する。
- プライマリーケアに必要な眼科領域の疾患に対する診療を経験し、その診断と対応について学ぶ。
- 眼科診療技術（検査法、診断法）を修得する。
- 顕微鏡手術の基本手技を修得する。
- 眼科疾患と診療体制を理解し、将来専攻する専門科との診療連携を深める。

研修期間

選択期間中に希望に応じて1ヶ月から3ヶ月まで設定できる。

研修方法

- (1) 診療見学、実習を通じた眼科疾患と診療に必要な知識、技能の修得
 - ① 外来診療：問診、診断、処置など
 - 小児眼科外来（月曜午後）
 - 緑内障外来（水曜）
 - 糖尿病眼外来（金曜午前）
 - 黄斑外来（火曜午後・金曜午後）
 - ② 病棟診療：手術症例の術前術後の診療・評価
 - ③ 眼科外来検査：視力検査、視野検査、光干渉断層撮影装置、蛍光眼底撮影検査など
 - ④ 手術診療：各種の手術への見学・参加
 - 硝子体手術：糖尿病網膜症・網膜剥離・黄斑疾患など
 - 前眼部手術：眼瞼手術、角膜疾患など
 - 緑内障手術：トラベクトミ、トラベクトミー、MIGS
 - 白内障手術：水晶体再建術（水・木・金曜日は、手術教育の実際を見学できます）
 - ⑤ カンファレンス
 - 眼科医局カンファレンス（火曜夕）
- (2) プライマリーケアに必要な眼科疾患の診療経験、診断と対応の修得
 - ① 視覚障害：視力障害、視野障害、その他の障害
 - ② 眼の充血をきたす疾患：感染性結膜炎、アレルギー性結膜炎、その他
 - ③ 眼科救急疾患：急性緑内障発作、外傷、その他
 - ④ 白内障・緑内障・糖尿病網膜症
- (3) 眼科診療技術（検査法、診断法）の修得
 - ① 細隙灯顕微鏡を用いて、角結膜、前房、水晶体を観察ができるようになる。
 - 白内障（水晶体の混濁）などの状態を実際に確認できる。
 - 前房深度が判定でき、抗コリン剤などの投与禁忌（緑内障発作誘発の可能性）の判断ができる。
 - コンタクトレンズや、シェーグレン症候群などに伴う角膜障害の状態を観察（フルオレセイン染色）できる。
 - 結膜上の異物をみつけることができる。
 - ② 眼底観察（眼底鏡検査・眼底カメラ撮影）が行えるようになる。
 - 眼底カメラで眼底の撮影を実際に行う。
 - 眼底鏡の使い方を修得し、実際に眼底観察を行う。
 - 糖尿病網膜症、高血圧・動脈硬化の病期判定法を修得する。
 - ③ 視力検査・眼圧測定（非接触測定）ができるようになる。
 - 屈折側定結果から、自分自身の眼鏡矯正視力を測定してみる。
 - 眼圧計測定（最新ノンコンタクト型）を実際に行ってみる。
- (4) 顕微鏡手術の基本手技を修得する。
 - ① 手術顕微鏡の基本操作ができるようになる。
 - ② 顕微鏡下で切開、縫合（持針器と鉗子を用いた器械縫合）などの基本操作ができるようになる。

※ 隔週火曜夕、ウェットラボ手術講習を行っています。豚眼を用いて、顕微鏡下での基本技術（切開と縫合）に関する実習を受けることができます。

関連病院

常勤医師のいる病院のみ

所在地	病院名	医師数
福井市	福井赤十字病院	常勤 5 名（福井大学医局員 2 名）
福井市	福井循環器病院	常勤 1 名
福井市	福井総合病院	常勤 1 名
福井市	つくし野病院	常勤 1 名
坂井市	市立三国病院	常勤 1 名
鯖江市	公立丹南病院	常勤 1 名
敦賀市	市立敦賀病院	常勤 1 名
敦賀市	国立病院機構敦賀医療センター	常勤 1 名
京都市	洛和会音羽病院	常勤 5 名（福井大学医局員 1 名）
小浜市	公立小浜病院	常勤 1 名
越前市	林病院	常勤 1 名

留学先

米国サンフォード/バーナム研究所、米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校、米国ネブラスカ大医学部、など。

眼科専門医

教室在籍者のうち、12名が取得しています。

学 位

教室在職者のうち、9 名が取得しています。

教室の歴史

初代教授 深見 嘉一郎

1983(昭和58年)～1993(平成5年)

京都府立医科大学医学部卒

1983年4月に京都第一赤十字病院眼科部長を経て福井医科大学眼科学講座教授に就任。

先天色覚異常の診療と研究における世界的権威。先天色盲に対する誤解や社会的偏見をなくすことに尽力した。色覚研究における原著論文、著書を多数執筆、発表している。

退官後は、福井医科大学名誉教授を歴任した。

**二代教授 赤木 好男**

1993(平成5年)～2011(平成23年)

京都府立医科大学医学部卒

1993年5月に京都府立医科大学医学部眼科学助教授を経て福井医科大学眼科学講座教授に就任。

着任当初から顕微鏡を用いた内眼手術を行い、福井県内に近代的な眼科マイクロサージェリーの普及につとめた。研究においては、糖尿病による眼合併症の基礎研究と臨床研究に取り組んだ。

糖尿病眼学会や日本白内障学会の理事長などを務めた。

退官後は、福井大学医学部名誉教授に就任。

現在に至る。

**三代教授 稲谷 大**

2011(平成23年)～

京都大学医学部卒

2011年7月に熊本大学生命科学研究部視機能病態学分野講師を経て福井大学医学部眼科学教室教授に就任。

現在に至る。



稲谷教授が語る 今後の眼科学教室とは――

医療情報誌「SENSHIN」2011年9・10月号取材から

平成23年7月1日付で福井大学医学部眼科の教授に、若干40歳の稲谷大氏が就任した、新教授に抱負や目標についてインタビューした。



『人間は視覚から80%の情報を得る』眼科を目指す医師たちへ

「福井大学に着任にあたって、まずどういう方針、目標を掲げられたのでしょうか？」

稲谷●第一の目標としては、眼科の入局者を増やすことを掲げました。福井大学だけではなく全国的に今、眼科に入局する医師が少なくなっています。背景には、平成16年に卒後臨床初期研修制度が変わったことが影響しているのではないかと考えますが、どちらといえば内科的な診療科に興味をもつ医師が多くなった印象があります。外科は手術が伴いますから、数カ月の研修だけではなかなかとつきにくい、眼科は手術など外科系に近いですから似たようなイメージがあるのかもしれません。しかし眼科医療について情報発信できるところは、福井県には福井大学しかありませんし、また眼科の入局者を増やしていかないと眼科医療のレベルアップにもつながっていきません。そういう観点から、若い研修医さんにぜひ、眼科教室を選んでもらいたいですし、眼科医をめざしてほしいという気持ちが強くあります。

「研修医が眼科を選択するためには、どんなことが必要だと思われるか？」

稲谷●一つには眼科に興味をもってもらうことだと思います。しかしそうはいっても二年間の研修ですべての診療科を回るのは難しいでしょうから、眼科はどうしてもオプションにならざるをえません。それで1カ月でもいいですから眼科の研修を受けてもらうのが一番、手っ取り早い。たとえば当直しているときにいろんな患者さんがきます。その中に頭痛を訴える患者さんがいたとします。頭痛には、目の疾患

が原因という場合もあるので、もしかしたら眼科を受診してみた方がいいのではないか、そういう診断をつけてもらうだけで眼科への興味は違ってきます。仮にその先生が他の専門を選択したとしても、目の疾患から来る頭痛であるという診断能力をもつことで間口は広がると思います。1カ月で眼科が面白いと思っていただけで、さらに延長して興味を深めていけばいい。スポーツでも野球やサッカーのプロをめざす選手は、最初はまず原っぱでキャッチボールしたり、ボールを蹴ってみて興味をもつことから始まるのと同じように、まずは眼科という領域に興味をもっていただくことが重要だと思っています。

「アメリカでは眼科医はステイタスが高く、人気職で、医師の中でも選ばれた人しか眼科医になれないと聞きますが、実際にはどうなのでしょう？」

稲谷●おっしゃるとおりです。アメリカでは視覚を制することが重要だとされています。人間は視覚から得られる情報が80%だといわれます。つまり、視覚を失うと全く生活が変わってしまう。視覚から入る情報が失われることは、社会的損失、経済的損失が大きいという認識が非常に強いのです。それゆえ眼科医は、人間の80%の情報を得る視覚という機能を守るという意味でステイタスが高いのではないかと思います。それは日本でも同じであるべきで、たとえば白内障の患者さんが手術で視覚が改善されると全く世界が変わります。そういう現実をもっと多くの人に知っていただきたいですし、そうなることで眼科医に興味をもつ人も増えていくのではないかと思います。

稲谷教授が考える今後の地域連携～臨床のレベルアップは地域連携から～

「県下の眼科医療のレベルアップには、地域の開業医さんや拠点病院との連携が不可欠ではないかと思いますが、地域との連携についてはどのようにお考えですか？」

稲谷●おっしゃるように、新しい診断や治療法を研究し、地域に公開し、臨床のレベルをあげていくのがわれわれ大学病院の使命の一つだと思います。そう言う意味では、臨床と研究は両輪です。もともと福井大学は糖尿病網膜症などでは地域にしっかりとアドバンテージがありますし、これにわたしの専門である緑内障の新しい治療法や術式が加われば、福井大学の眼科医療は全国的にもかなりアドバンテージがもてると思っています。地域との医療連携でいえば、わたし自身、福井はまったく未知の土地で、地元の先生方との交流もこれからつくりあげていくというのが現状です。しかし、同門会組織がしっかりしていますので、時間を見つけて地域の先生方と情報交換しながら、大学病院でできる治療と、開業医さんが取り組める治療についてコミュニケーションを深めているところです。その一つの方法として、メジャーな疾患については地域の先生方と疾患別の「手帳」をつくって、患者さんに共有してもらうことでネットワークを構築していこうと考えています。

「地域連携でとくにどんなことが大切になると考えられますか？」

稲谷●やはり術後の管理だと思います。たとえば緑内障の患者さんを

紹介していただいて、大学病院で手術をし、その後の管理については再び開業医さんに患者さんをお返しして診てもらおう。その場合、術後管理については大学病院ができるだけ地域の先生方の近く出かけて行ってより実態に合わせた術後管理をお話させていただくことが重要になると思います。そのために、地元の先生方を対象にした研究や講演の場を設けて直接、やりとりできる環境をつくっています。現状では、大学主催の「集談会」が年2回、年末に症例検討会が1回、学術講演会が年3～4回ありますので、こういう場を通してできるだけ地元の先生方との情報交換や交流を深めていきたいと考えています。

「どんな医局をめざすのか、最後に眼科医をめざす人たちにメッセージをお願いします。」

稲谷●目的を持って挑戦していくことが大事だと思います。わたし自身、研修医時代に、人がやらない新しい分野を研究し、開拓したいと思って取り組んできました。たまたま眼科に入局した時の先生が、網膜の加齢黄斑変性症とか、緑内障、網膜色素変性症が専門だったこともあって、専門分野を含めて自分で開拓していける可能性があったことが力になりました。若い先生方には、組織の中で自由にやりたい研究ができる環境をつくっていききたいですし、出来る限り先生方のモチベーションを応援していきたいと思っています。